小さな旅
―― 山形県米沢市への旅 ――

うるま市　知念　正雄

私は初めての土地を訪れて、2～3の温泉宿を渡り歩く4～5日間の「小さな旅」を楽しんでいる。

今回の旅は、2023年7月中旬に、山形県米沢市へ旅した。沖縄エッセイストクラブ作品集37（新星出版）にて、元県知事・稲嶺恵一さんのエッセイ・「上杉茂憲－県費留学生の父－」を読み、一度米沢の地を訪ねたくなったのである。沖縄県2代目県令となった米沢藩最後の殿様・上杉茂憲は熱心に琉球列島をくまなく調査をして、貧しい沖縄を立て直すには人材育成が最重要であるとして、万難を排して4名の県費留学生を東京に送ったという。私はこれまで、沖縄の歴史に興味を示すことなく、郷土史の本に目を通すことをしなかった。稲嶺さんの随筆を読み、4人の留学生の一人が、私の郷里である（旧）東風平村（現在の八重瀬町）の謝花昇氏であることを知った。謝花昇氏は東風平村の偉人で、氏の顕彰碑が村の小学校の敷地内にあり、学校の授業の中で、幾度となく悪代官・奈良原繫氏の横暴な仕打ちによる謝花氏の悲運な生涯が語られたが、その前の県令が上杉茂憲であるなどは私には初耳であった。そのような理由で、今回は米沢行きを決めたが、旅の新鮮さが失われるのが嫌で、今回も米沢藩について詳しく調べることはしなかった。

那覇から羽田に飛び山形空港へ乗り継いだが、夕方になって降り立った山形空港前のタクシー乗り場には1台の車もなかった。スマホを持たない高齢者には、ハタと困ってしまったが、幸いにも一人の中年女性が現れてご自分のタクシーのほかに私たちのも呼んでくれたのには助かった。市街地から離れた小さな空港では、客待ちタクシーがいないことがあるのを知っていなければならない。見知らぬ方の親切により、楽しみにしている温泉宿にやっと落ち着き、明日からの旅に思いをはせた。

翌朝は、タクシーにて米沢に向かった。車中で運転手さんに、上杉家と沖縄との関係を尋ねてみたが、全く知らないのか何の返事もかえってこず、やはり米沢の人にとっては2代目藩主・上杉鷹山しか頭にはないようだ。上杉鷹山といえば、あの有名な格言「なせば成る　なさねばならぬ何事も、成らぬは人の　なさぬなりけり」が一番でしょう。これで米沢藩が貧乏から脱却して建ち直ったという史実は有名であり、現在でも贅沢・華美を慎み、節約を重んじる風土がこの地にあるという。鷹山も偉かったが、藩の民衆も賢かったのである。上杉神社を参拝しながら、上杉家の歴史年表の中に上杉茂憲の名前を確認したので、安心した気持ちで記念館を後にした。現在の義務教育の中では、どの程度郷土の歴史が教えられているのか私にはわからないが、上杉茂憲の功績は、やはり沖縄県民の多くが認知して、次の世代へと伝えていくべきだと思った。

小雨のちらつく天気ではあったが、上杉神社の周辺の食事処には「米沢牛」の文字が目立ち、観光客が賑わっていた。

次の日は蔵王を経由して仙台に向かったが、天候が悪く、深い霧と強風に覆われた蔵王では「お釜」を全く見ることができずに山を下り、「作並温泉」に宿をとった。

翌日は仙台の大学でアメフトに熱中している孫が新幹線ホームに来てくれたので、そのたくましく成長した姿を見て、安堵した気持ちで青森へ向かった。今回の旅の最終地は、家内の故郷である秋田県大館市であったが、旅の目的地はあくまでも米沢の上杉茂憲であり、郷土史をしっかりと勉強したのちに、機会があれば再度米沢を訪れてみたい。

原 稿 募 集

プライマリ・ケアコーナー（2,500字程度）

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。

奮ってご投稿下さい。

随筆コーナー（2,500字程度）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

なお、スポーツ同好会や趣味の会（集い）などの自己紹介や、活動状況報告など、歓迎いたします。

原稿送付先

〒901-1105　南風原町字新川218-9　沖縄県医師会広報委員会宛

E-mail：kaiho@okinawa.med.or.jp

※原稿データは、出来ましたらメール送信又は電子媒体での送付をお願い申し上げます。